

## フィールドワークの今 そして、フィールドワークをめぐる言説

## フィールドワークの復権

ジョン・ヴァンニマーネン（森川渉・訳）『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法』現代書館、1999年、p. 11 「フィールドワークをベースにして採集した素材は、多重回帰やカイニ乗検定などといった手続きから直接できあがってくる論文に磨きをかけ、固有の色を添えるために、ごく控え目に使われたにすぎなかった」

- ↓
- ◎ W・F・ホワイト「日本語版への序文」『ストリート・コーナー・ソサエティ』（奥田道大他訳）有斐閣、2000年、p.ii 「統計的仮説のテストが、長期にわたって起こる社会的、経済的変化のダイナミクスについて、前進した知識を提供するものでないことを認識した」

## フィールドワークの担い手

- ◎ 伝統的フィールドワークの担い手：研究者
  - 民族学者、人類学者、社会学者、地理学者
- ◎ 従来からの近接領域：職業的ライバルたち
  - ルポルタージュ（ジャーナリスト）
  - 旅行記（紀行作家）
  - 探検記（探検家）
  - 差異化の作業としてのエスノグラフィー論
- ◎ 新しい参加者の参入：スタディーツーリズム
  - 学生（学部生、大学院生）
  - 一般市民（観光客）

## フィールドワークのひろがり

- ◎ 分野を超えた広い知的営みとしての調査法
- ◎ 学問分野固有の調査技法（社会調査の下位概念）
- ◎ ボランティアや海外援助、地域活動などの社会参加や実践活動と一体のもの

## フィールドワークのひろがり

- ◎ 分野を超えた広い知的営み
  - 佐藤郁哉「『フィールドワーク』とは、参与観察とよばれる手法を使った調査を代表とするような、調べようとする出来事が起きているその「現場」（＝フィールド）に身を置いて調査を行う時の作業（＝ワーク）一般をさす」佐藤郁哉『フィールドワーク—書を持って街へ出よう』新曜社、1992年、p82

## フィールドワークのひろがり

- ◎ 学問分野固有の調査技法（社会調査の下位概念）
  - 箕浦康子「人と人の行動、もしくは人とその社会および人が創り出した人工物との関係を、人間の営みのコンテキストをなるべく壊さないような手続きで研究する手法をフィールドワークと呼び、現地視察や植物相とか地形が研究対象であるような地理学的なフィールドワークとは区別する」箕浦康子『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房1999年、p3-4
  - 生活史法（ライフヒストリー研究法）、質問紙法、インタビュー法などと並列

## フィールドワークのひろがり

- ◎ 広義のフィールドワーク
  - ・ ボランティアや海外援助、地域活動などの社会参加や実践活動と一体のもの
  - ・ 国際協力に伴うさまざまな実践を広くフィールドワークと位置づける
    - 庄野護『国際協力のフィールドワーク』南船北馬舎、1999年
  - ・ 観察者としてとどまるだけでなく非営利活動団体（NPO）の一員として積極的に地域活動に参加する過程を重視する
    - 杉万俊夫『よみがえるコミュニティ～フィールドワーク人間科学』ミネルヴァ書房、2000年。

## フィールドワークの定義は可能か？

- ◎ フィールドワークの定義の多様なひろがりには、研究者の多様なフィールドワーク観を背景にしている。
- ◎ 研究者のフィールドワークへの思い入れや言説が多様な定義の背景にある。
- ◎ しかし、それらのフィールドワーク言説に共通のベースはあるのか？

## フィールドワークをめぐる多様な言説

- ・ 佐藤郁哉『フィールドワーク-書を持って街へ出よう』新曜社、1992年
- ・ 好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房、2000年
- ・ 箕浦康子『フィールドワークの技法と実際-マイクロ・エスノグラフィ入門』ミネルヴァ書房1999年
- ・ 山田勇『フィールドワーク最前線 見る・聞く・歩く-京大探検部が誇る15人の精鋭たち』弘文堂、平成8年
- ・ 中村尚司・広岡博之『フィールドワークの新技法』日本評論社、2000年
- ・ W・F・ホワイト（奥田道大他訳）『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣、2000年
- ・ ジョン・ヴァン＝マーネン（森川渉・訳）『フィールドワークの物語-エスノグラフィの文章作法』現代書館、1999年
- ・ 市川健夫『フィールドワーク入門-地域調査のすすめ』古今書院、1985年
- ・ 須藤健一編『フィールドワークを歩く-文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院、1996年
- ・ 渡部忠世『モンスーンアジアの村を歩く-市民流フィールドワークのすすめ』家の光協会、2000年
- ・ 加藤秀俊『取材学』中公新書、1975年

佐藤郁哉『フィールドワーク-書を持って街へ出よう』新曜社、1992年

- ◎ ・フィールドワークは「ロスト・アート」どころか、これまで扱として確立されたことさえなかったのです。p27
- ◎ ・「フィールドワーク」という言葉には、ロマンチックな響きがあります。p28
- ◎ ・カルチャーショックと自己変容の経験は、まさに我々が「フィールドワーク」という言葉を耳にするときに、真っ先に思い浮かべるものでしょう。
- ◎ ・まず第一の思い浮かべるのは、・・・フィールドに身を置き、目で見、耳で聞き、手で触れ、肌で感じ、舌で味わった生（なま）の体験にもとづく調査レポートではないでしょうか。p30
- ◎ ・「フィールドワーク」とは、参与観察とよばれる手法を使った調査を代表とするような、調べようとする出来事が起きているその「現場」（＝フィールド）に身を置いて調査を行う時の作業（＝ワーク）一般をさす。p31
- ◎ ・フィールドワークの「現場（フィールド）」とは、遠く離れた未開の地に限らず、フィールドワーカーが第一次資料を求めて調査を行う場所や状況一般をさしている。P30

佐藤郁哉『フィールドワーク-書を持って街へ出よう』新曜社、1992年

- ◎ ・フィールドワークというのは、とてつもなく非効率で無駄の多い仕事です。P32
- ◎ ・フィールドワークは生きた人間、社会、文化との協同のなかで異文化についての深い共感にもとづく理解とそれをまとめた「民族誌（エスノグラフィ）」という量かなまりを生み出していくための方法なのです。
- ◎ ・フィールドワークというのは、自分のなじんできた文化とは異質の文化と接触し、それにともなって生じるストレスと当惑の体験、すなわちカルチャーショックを通して異文化を学んでいく作業です。・・・フィールドワーカーは・・・「プロの異人」であり、カルチャーショックの達人なのです。p39
- ◎ ・最もフィールドワークに向いていないのは、「フィールドワーク至上主義者」や「エスノグラフィ-帝国主義者」だといえます。p20
- ◎ ・技としてのフィールドワークには、どうしても徒然修行が必要であるが、・・・何らかの系統的訓練が不可欠なのである。P18
- ◎ ・問題は、単純で安直な限定概念の発想にもとづくワンショット・サーベイと呼ばれる単発式のサーベイにあるのです。P82

好井裕明、好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房、2000年

- ◎ ・「フィールド」には、調査となる場所、地域、対象となるひとひとだけでなく、調査をする「わたし」と対象との相互作用、他者や状況への身体的、情緒的な関与のありよう、より根底にある社会的問題関心のうごめきなどが含まれています。p8

箕浦康子『フィールドワークの技法と実際-マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房1999年

- ・フィールドワークという言葉は、**現地に行ってなにがしかのデータを得てくること**、たとえば、関係機関で資料を収集し現地で半日ほど観察してつくる実地検分にも、地理学者が地形や植生を現地で観察し、自然と人々とのかわり合いを聞き取り調査することにも使われる。p3
- ・人と人の行動、もしくは人とその社会および人が創り出した人工物との関係を、人間の営みのコンテキストをなるべく壊さないような**手探りで研究する手法**をフィールドワークと呼び、現地視察や植物相とか地形が研究対象であるような地理学的なフィールドワークとは区別する。p4
- ・人の日常行動の背後にある文化（を）その人の生きている文脈ごと抽出しようと試みるのが、フィールドワークである。P2

山田勇『フィールドワーク最前線 見る・聞く・歩く-京大探検部が誇る15人の精鋭たち』弘文堂、平成8年

- 山田勇「フィールドワークとは」
- ・フィールドワークの分野は、極めて**広い**。
- ・フィールド派は**個性的**である。あまり人のことを気にせず、**独立独歩の人生**を歩む。
- ・フィールドは厳しい世界であるが、**人間が鍛えられる場**でもある。
- ・フィールドワークは**探検の根本**である。机の上だけでは、フィールドワークはできない。
- ・**日常を離れて**野にでよう、というのがフィールドワークの根本であり、それにつぎる。
- ・「机を離れて、足で歩こう」でもよい。
- ・フィールドは**無限**である。・・・我々の周りには無限のフィールドが広がっている。

山田勇『フィールドワーク最前線 見る・聞く・歩く-京大探検部が誇る15人の精鋭たち』弘文堂、平成8年

- ・フィールドワークには、全く学問とは異なった場もある。たとえば、ジャーナリズムや商社、カメラマンの世界にも多くの優れたフィールドワーカーがいる。
- ・親念の世界だけでフィールドを考えるのは、フィールドワークではない。
- ・フィールドほど、個性が尊重される場はない。・・・**強い精神力**が必要である。
- ・**場と自分とのいわば対決**がフィールドワークである。
- ・まず目が冴え、そして足が立ち、そして、外で出ていく。これがフィールドワークのおそらく、最も**プリミティブ**、かつ**重要な段階**である。だから、フィールドワークというのは、人間、いや、人間に限らず、おそらく**生物一般にとって最も基本的な行為**であるといえる。
- ・フィールドワークで何が一番必要とされるか、・・・私は躊躇なく「**直感力**」といいたい。・・・その直感力はどうして養えるのか。それは、やはり**経験**である。・・・その経験の過程で、最も大事なものはおそらく、「**観察**」であろう。P5

山田勇『フィールドワーク最前線 見る・聞く・歩く-京大探検部が誇る15人の精鋭たち』弘文堂、平成8年

- ・最も簡単なことは、**ひたすら歩く**ことである。
- ・**心を空に**していると、何でも入っていく。何でも入れられる。
- ・フィールドに**ケガ、病氣、そして死はつきもの**である。・・・何人かの友人は、車の事故で、傷をおたり、死んだりしている。これは避けられない事故である。
- ・会議で上がった血圧も、蓄積した脳細胞も、**運動不足でたんできた筋肉もすべて、フィールドに出ることによって解消**する。
- ・だいたいいつ、フィールドへ出ている間は、**酔状態**になっている。知らない間にも無理が生じている。・・・長くフィールドを楽しむうと思えば、病もフィールドワークの一部と考えて十分手当をすべきである。
- ・フィールドでは、自分で「**分かった!**」と思う瞬間が来る。それがないと、フィールドワークはひとつの区切りにならない。
- ・その場の雰囲気や**文章に伝える**ことが、もうフィールドを汚すような感じにさえなるのである。
- ・フィールドワークは、ある意味で**夢の世界**である。

中村尚司・広岡博之『フィールドワークの新技法』日本評論社、2000年

- 広岡博之「フィールド調査の新展開」
- ・フィールド調査の方法として、**フィールドワークとアンケート調査のまったく異なる2つの調査法**がある。P80
- ・フィールドワークは、対象とするフィールドに長期間滞在し、そこに住む住民の生活に密着して**参与観察を中心に行う調査法**である。P80
- ・システム科学のアプローチをフィールド調査に利用することができる。・・・フィールド調査を**モデル化のための情報収集の方法**として実施することができる。p84-85
- ・フィールドワークとアンケート調査の併用を勧めたい。P85
- ・対象地域のなんらかの改善や活性化などを目的としてフィールド調査を行う場合は、・・・調査者が対象のフィールドに関する**モデル構築を目的に調査**すると**効率的**で、・・・p87-88
- ・関係する研究者の**全員がシステム科学を理解し、コンセンサス**が得られる必要があるp86

W・F・ホワイト（奥田道大他訳）『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣、2000年

- ・教授たちは社会構造や社会過程について重要なレッスンをもたらすことを発見するかたちで、個々人の性格や**集団を読むことの楽しみ**を覚えたからであった。「日本語版への序文」p.I

ジョン・ヴァン＝マーネン（森川渉・訳）『フィールドワークの物語-エスノグラフィーの文章作法』現代書館、1999年

- ・フィールドワーカーは彼らの研究対象となる人びとに対して**有利な立場**に立っている。Nader 1972 p25
- ・予算という現実的な世界、学問的興味、**アカデミズムの政治**、そういったすべてがフィールドワークに結びついてくる。p25

市川健夫『フィールドワーク入門-地域調査のすすめ』古今書院、1985年

- ・市川健夫『フィールドワーク入門-地域調査のすすめ』古今書院、1985年
- ・民俗学や文化人類学も、地理学同様にフィールドワークを行うが、統計資料をほとんど併用しないし、また地図を読んだり、あるいは主題図を作成することはあまりしない。p1
- ・地理学のおもしろさが理解できないうちに、卒業してしまう学生が多いようだ。地理学を始めて**10年以上経たないと、学問のもつ本質をつかめない**し、楽しむ段階に達することが難しいかもしれない。p1
- ・地理学は景観を観察しただけでも、いろいろなおもしろいことを認識することができる。p1

鵜飼正樹「社会学」 須藤健一編『フィールドワークを歩く-文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院、1996年

- ・フィールドワークは、たんにデータ収集の技法であるだけでなく、社会学という**学問のありようを根元的に批判する足場**ともなりうる。私は考える。p19
- ・本質において、社会学は「参与観察」的な学問であるはずだし、社会学者はフィールドワーカーであるはずなのだ。p19
- ・フィールドワークは、(社会学) **理論にたいする異物を提供する役割**を積極的に引き受けてゆくべきではないだろうか。p20
- ・フィールドワークは、いわば一点突破・全面展開という戦法である。p21
- ・フィールドワークは、「社会学」というメガネそのものを疑うことへもつながっていく。p22
- ・フィールドワークを「書く」とき問われるのは、社会学のことばの有効性である。フィールドワークは社会学の**ことばを鍛える場**でもあるのだ。P2

須藤健一「フィールドワークとはなにか」 須藤健一編『フィールドワークを歩く-文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院、1996年

- ・自分が生まれ育った環境とは異なる社会や文化のもとへ足を踏み入れ、そこに住む人々と暮らし、かれらの生活や社会のしくみなどを学び理解するという方法が、フィールドワーク (fieldwork) である。p11
- ・フィールドワークは人類学の方法論として開発された技法で、その調査には欠かせない手法になっている。だからといって、フィールドワークは**人類学だけの専売特許であるわけではない**。p11
- ・マリノフスキーは、フィールドワークが**科学的客観性**に裏付けられた**調査作業**であり、独自のアカデミックな学問を支えるのにふさわしい方法論であることを主張した。P12

加藤秀俊『取材書』中公新書、1975年

「ものを書いたり、しゃべったりする人たちは、『情報』の職人さんなのだ、といってもよい。」p8

「**学者も主婦も、新聞記者も学生も、サラリーマンも子どもも**多かれ少なかれ、取材活動をしているのである。そしてそのじょうずたは、しばしば**技術の問題**である。」p30

「現地に出かけてみることをわたしはすすめる。・・・かならずや、なにかの取極があるはずなのだ。・・・ことばでいいあわすことのできない、なるほど、という実感が現地に行くことで**直感的にわかったりする**のである。」p127-128

渡部忠世「市民流フィールドワークとは」 渡部忠世『モンスーンアジアの村を歩く-市民流フィールドワークのすすめ』家の光協会、2000年

- ・フィールドワークという場合における「フィールド」とは「現場」というような意味に近く、多くの場合に、「日常の生活の場」あるいは「ものごとが行われているところ」などを指します。
- ・ひとつの集落、村、町、あるいは部族社会などといった、いわゆるコミュニティの「現場」に一定期間にわたって住みついて、そこにおける生活のあらゆる面のデータを網羅的に集め、記録し、解析することを目的とした調査作業（ワーク）である。
- ・フィールドワークにたずさわる学者たちは、長期にわたる不便な生活に耐えながら、同時に・・・**「精神の葛藤」とも常に対峙**している。
- ・フィールドワークには**王道も近道もない**ようです。外に出て、**ひたすら歩く**こと、そして、なにことも自分の目で確かめること以外に、どんな選択肢もないと考えるべきでしょう。・・・それがフィールドワークの第一歩である。

### 交錯する2つの立場、2つの位置づけ、2つの習得法、2つのフィールドワーカー像

- ◎ 2つの立場
  - 理論や既存の学問に対する本質的アンチテーゼ
  - 理論や学説を補強するひとつの材料
- ◎ 2つの位置づけ
  - 研究室をでた総合的実践（社会変革やNPO活動）
  - あくまで社会調査あるいはエスノグラフィーの1方法
- ◎ 2つの習得法
  - 個別技能を習得する（職人の技として）
  - 技術として一般化する（誰にもできる技術として）
- ◎ 2つのフィールドワーカー像
  - 全人格的陶冶を目指す求道者
  - ただの調査者=ふつうの市民

### フィールドワークのイデオロギー

- ◎ **本質主義的**フィールドワーク観
  - +現場から学ぶという姿勢
  - +対象への敬意
  - -エスノグラフィー帝国主義
  - -権威主義、「現場」至上主義
- ◎ **構築主義的**フィールドワーク観
  - +現場体験を相対視する姿勢
  - +ポスト植民地主義批評
  - -テキストへの回帰と偏重
  - -不可知論

### フィールドワークをめぐる論争

- ◎ エスノグラフィーへの批判的検討
  - エスノグラフィーを著述する書き手としての社会学研究者の存在自体を社会的に考察する研究
  - エスノグラフィーの文体についての研究
- ◎ ポスト・コロニアリズムをめぐる論争
  - 先住者や少数民族の側がフィールドワークに対する批判
  - 文化人類学の根拠を揺り動かす大きな衝撃力
- ↓
- ◎ **フィールドワークの結果よりフィールドワーク論への関心**

### 調査者の営みが「フィールドワーク」であることの共通する要件とは？

- ◎ 1 調査地の**人びとの生活に深く入り込む**こと。・・・カルチャーショックの不安と孤独に耐え、その経験を通して自文化とは異なる文化的・社会的コンテクストの発見につとめること
- ◎ 2 **言語の習得**。
- ◎ 3 **長期の住み込み**。
- ◎ 4 人びととの間の**信頼関係**（ラポール rapport）の確立。調査目的を理解し自分の経験を解釈し語るインフォーマント informant（情報提供者）を選ぶこと。
- ◎ 5 現地社会の**メンバーになる**こと。・・・現地の成員として社会関係の権利義務を果たすことも経験になる。

出典： 須藤健一「フィールドワークとはなにか」須藤健一編『フィールドワークを歩く-文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院、1996年、p13

### フィールドワークの「現実」とその問題

- ◎ **職業的研究者（大学人）のフィールドワーク**
  - 長期のフィールドワークは困難（夏休み、サバティカル）
  - 予算が付いたから調査という制約（例：科研費）
  - 通い慣れたフィールド（カルチャーショックのない現場）
- ◎ **アマチュアリズムと市民参加**
  - 観光としてのフィールドワークの隆盛（スタディーツーリズム）
    - 短期の訪問、言語の非習得
    - ガイドという介在因子（ミドルマン問題、ラポールの不在）
    - アマチュアの参加による権威への挑戦
- ◎ **現地からの異議申立**
  - 現地からの批判と取り込み
    - オリエンタリズム批判
    - 現地の戦略的本質主義という「問題」
    - 現地エリートとの癒着（現地ヘゲモニーからのお墨付き）